

高橋 和志・山形 辰史 編著

## 『国際協力ってなんだろう』

### ―現場に生きる開発経済学―

岩波ジュニア新書



められています。そのため、まずどのような分野で、どのような協力がなされてきたか知ることが国際協力理解の最初の一步として重要となります。

ります。

また、技術や制度の発展にともない、開発途上国の社会は、ダイナミックに変化し続けています。そうした実情を知ることなくしてはせっかくの協力内容も、現地に適さず、効果をほとんどもたらさないかもしれません。

本書は、これから国際協力の道を志す方が、最初に手にできる一冊として、これまでの国際協力の取り組みや、近年の開発途上国の政治・経済の動向を、テーマごとに解説し、まとめたものです。類書と比べて、開発問題の全体像が見えるように、できるだけ多くのテーマをカバーすること、そして、それをわかりやすく伝えることに力点が置かれています。

本書は大きくわけて六章からなり、各章は三から六のテーマからなります。第一章『開発のめざすもの』（以下、

二重鍵括弧内は章タイトルを、鍵括弧は各テーマのタイトルを示します）では、人間の安定的な生活を保障する取り組みが強化されるにつれ、国際協力の分野で重要性を増している「貧困」「ジェンダー」「障害」「保健」「感染症対策」「教育」の六つのテーマを取り上げています。

続く第二章『平和と公正を実現するために』では、開発途上国に今も昔もはびこる「汚職」の問題の他、特に一九九一年のソ連崩壊以降、国際社会で顕著となってきた「紛争」問題、ソ連崩壊以降自由主義経済の推進とともに活発化してきた「法制度改革支援」に関して解説を行っています。

第三章『宇宙船地球号の舵取り』では、途上国、先進国が一体となり、また政府と民間が一体となり、地球規模で解決を進めていく必要性が高い環境問題に関するテーマとして、「環境」「排出権取引」「資源循環」の三つに焦点があてられています。

第四章『開発への取り組み』では、先進国や国際機関が途上国問題の解決に向け、長期にわたって実施してきた「開発援助」に加え、途上国から発信された新たな開発の試みとしての「マイクロファイナンス」や「貧困削減」政策としての条件付き補助金の取り組みが紹介されています。

第五章『開発途上国のイノベーション』では、途上国と先進国で必要とされる「技術」の違いを説明したうえで、医薬品開発などに伴う「知的財産」、

インターネットや携帯電話に代表されるような「情報技術革命」、農業分野における「農業技術革新」などの技術開発・保護が途上国住民の生活にもたらす影響を探っています。

第六章『国境を越えよう』では、情報技術や交通手段の発展とともにヒト、モノ、カネ、企業が国境を越えて移動している事実に着目し、「貿易自由化」「国際価値連鎖」「産業集積」「国際労働移動」を解説し、それらを総括する形で近年加速する「グローバルイノベーション」の意義やあり方を考察しています。

各テーマは相互に関連している箇所がありますが、基本的に独立しているため、読者の興味あったところから読み進めることができるのが本書の特徴のひとつです。また、執筆者は経済学をバックグラウンドしている者が多く、そのため、内容もやや経済学の研究成果を反映するものが多いですが、経済学の知識が全くななくても、読み進められるように工夫されています。

本書が読者の開発途上国の現状理解と将来展望の一助となることを、執筆者一同、切に願っています。

（たかはし かずし／アジア経済研究所 海外派遣員）

一九四五年当時、日本国民の多くが貧困や飢餓に苦しみ、戦争で疲弊した生活からの早期回復を望んでいました。アメリカや世界銀行などからの経済的支援を受けつつ、日本はその後比類なき高度経済成長を実現していきます。その結果、先進国の仲間入りを果たすとともに、援助される側から援助する側へと転換を遂げました。他方、戦後六五年、二一世紀に入り一〇年経った今日においても、慢性的な貧困や飢餓、感染症、政治的腐敗紛争、環境破壊などによって世界の人口の約八割を占める途上国の人々の生活が脅かされています。

こうした状況から、開発途上国のために「何かしたい」という熱い情熱を持って、国際協力の道を志す方が近年増えています。しかし、いざ行動を起こそうとしても、「何をしたらいいのか、何が自分に向いているのかわからない」という悩みを抱えている人が少なくないように思われます。

実際、開発途上国は様々な問題に直面しており、多分野での国際協力が求